

本当に使える まちのサイン(案内板)を考える

【提案者】

今城逸雄(高知商工会議所)

宮崎篤子(高知市立自由民権記念館)

徳弘博国(土佐山田町社会福祉協議会)

【アドバイザー】

石筒 覚(高知大学)

2004年11月2日

私達のグループでは「本当に使えるまちのサイン、案内板を考える」というテーマで、これまで取り組んでまいりました。なぜこのサインに着目したかと申しますと、それぞれ所属の異なる私達グループが、共通の課題として取り組みやすいテーマではないかということと、普段何気なく見ているサインが、街のあり方みたいなものを示して

いるのではないかと、そういった期待も持ってこのテーマに取り組んでまいりました。

サインの意義

サインとは“わからない人”や
“知らない人”のためのものである



まず、サインの意義について、整理してみました。サインというのは、その土地について分からない人や、知らない人のために、例えば、距離であったり、目的地までの方角であったり、そういったものを分かりやすく示す、そして道を迷わぬ、辿り着くために示すものであるということが言えると思います。ここに二種類の異なるサインを示

してみました。左が主に車から見るサイン、右は歩行者が見るようなサインです。車で見るサインについては、スピードを出しながら通過しながら見るようなサインになっていますので、情報が非常にシンプルで限られた情報だけが整理されているといったことが言えます。桂浜・空港・室戸というように、ここの間にも当然いろいろな土地ですとか、さまざまな情報があるはずなのですが、より目的地に早く辿り着くために、いろいろな情報というのが切り取られて「車社会」みたいなものを如実に示したようなサインではないか、というふうに考えられます。同じ写真上に、はからずも歩行者用のサインがありますけれども、この歩行者にとっては、例えば、室戸まで76kmかかるというような情報はほとんど意味をなさない、そんなふうに思

えます。一方、右の歩行者を対象としたサインを見てみますと、車対象のものに比べて、もう少し情報が細かく密になっています。そして距離感覚も、もうちょっと車対象のものよりも狭い範囲、せいぜい数百メートル位の情報が示されています。何故かといいますとこちらのサインはゆっくり歩きながら、または時に立ち止まって見ることができるため、車対象のものに比べてもう少し密な情報を示すことができるのだと思われます。

サインを通して…

街のあり方を車中心に考えてきたことへの反省
歩行者の視点に立つことの重要性を認識

「歩く」意義の再発見

このように私達はサインを通して、今まで、街のあり方が「車中心に考えてきたのではないか」、そういったことについて振り返ってしてみました。それから時には、ゆっくり歩いたり立ち止まったりといったように、歩行者の視点に立つ、そういったことの重要性について認識してみました。そしてそれは同時に「歩く」意義、つまり歩かないと、また、車から降りて歩いてみないと、見落とすことが多くあるのではないかと、そういった「歩く」意義を再発見することにもつながっていきました。

高知のまちを歩いて…


“高知城” “はりまや橋”を歩いてみると…

方角と違う地図(常に上が北)
覚えきれない情報がある地図

↓

歩く人にわかりにくい地図

わかっちゃうろう



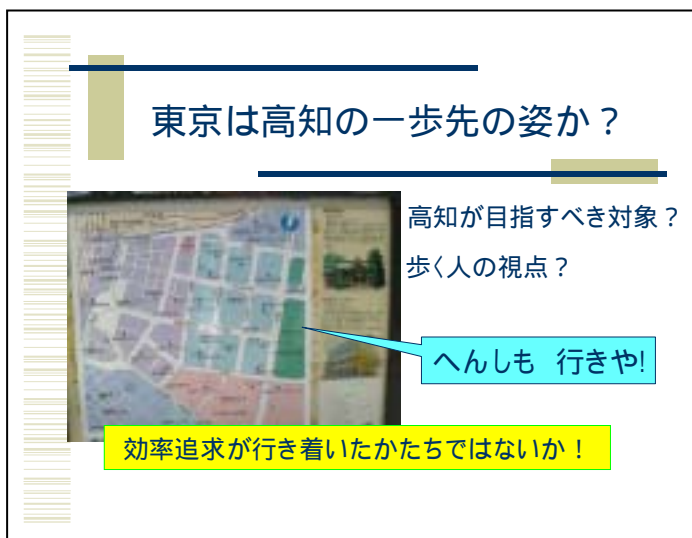
そこで私達は、高知の街を歩いてみました。高知城からはりまや橋を歩いてみますと、いろいろなサインが発見できます。例えば、これは高知市中心部の史跡を巡るまでのルートを示した地図のサインです。これを見てもみると、二点ほど指摘できるような事があるのではないかと思います。ひとつは方角と違う地図であるということです。どういうことかと言いますと、

地図というのは自分の立っている場所・角度等が、この地図を見ている方向と一致していないと、例えば、ここに行きたいのに地図が逆さを向いていますと、初めて

来た観光客になんかにとってみれば案内が非常に分かりにくい、そういったことが言えると思います。高知の街中にある地図は「常に北が上で、南が下である」と言うように歩く視点から見ると若干分かりにくい、そのような印象を受ける地図・サインが多く見られました。

それから二つ目として、覚えきれない情報があるということです。例えば、この地図は端から端まで、約3km位を表しているサインになっていますが、おそらく歩く人にとってみて、3kmもの道というのはちょっと遠くて、ここからこちらまで歩くまでに、ここの情報というのは、おそらく記憶の中に留めておけないのではないかと感じます。

従いまして、これら総合してみますと、歩く人には若干分かりにくい地図であると言えます。こちらの方角は常に上が北というのは、私達どうしても高知というのは、東西南北、北が四国山地で、南が太平洋というように地理感覚を持っていますので、まあどうこう言っても、上が北というのを分かっている“わかっちゅうろう”というような認識があるように思われます。覚えきれない情報というのは、これはせっかく歩く人のためのサインではありますが、ひょっとしたら作り手は車に乗って車社会の発想で作られた、そういったサインなのではないか、そんなふうに感じられました。



そこで高知よりも、もっと歩くという行為そのものが日常的に身近な東京のサインは、どうだったかということも見てまいりました。

これは東京の“ど真ん中の新宿”それも都庁周辺の地図を表示したサインです。さきほどと比べますと北マークが、北がこちらを向いています。どういうことかと言いますと、立って見

ている景色と地図が、方角に一致していますので、自分がこちらに行きたい場合はそのまま真っ直ぐ行けばいいというように、歩く立場にとってみれば分かりやすい、そのように感じられました。なおかつ距離も、数百メートルぐらいの案内表示になっておりまして、ここからここに行った時には、また次の地図があるというように、より歩く人にとってみれば分かりやすい、そんなサインでした。

しかしこれが、私達が本当に目指すべき歩く人の視点に立ったサインかどうかということをよくよく考えてみた時に、新宿で目的地により早く辿り着くために、効率追求が行き着いた形ではないかと、そんなように私達は結論づけました。これを私達は、“へんしも行きや”的な発想から作ったサインであるというように考えました。

今の状態をもたらしたものは？

- ◆ 「なんとかなるろう」
おおざっぱに作ってしまう(土佐人)
- ◆ 「へんしも行きや!」
車社会による情報の切り取り
過程を省略し、急いで結果(目的地)へ(都市人)
改善の余地あり!?
- ◆ 「こればあやったらわかるろう」
土佐人が都市人になってしまった結果 わかるろう

ここで、今まで話してきたような事をもうちょっと整理してみます。まず、いま現在のサインは、どうやって出来てきたかということを考えてきた時に、最初に私達が、もともと持っている土佐人のもともと持っている“何とかなるろう”というような、悪く言えば“大ざっぱ”に作ってしまうような気質がもともとあったのではないのでしょうか。そして、車社会が到来し

たことによって、目的地に早く急いで辿り着くために、その過程の情報を切り取ってくる、ここで私達は都市人の気質であると言いましたけれども、“へんしも行きや”的なものになっていきました。“何とかなるろう”的な土佐人氣質と、“へんしも行きや”の都市人氣質と出会ったことで、“こればあやったらわかるろう”と、さきほど二つ前に示したスライドでも、情報として決して間違っているわけではないのですが、歩く視点という面ではちょっと分かりにくい、そんなようなサインが何故生まれたかというのは、土佐人氣質が都市人氣質に出会って、“こればあやったらわかるろう”というような考え方のもとに作られているからではないかというように考えました。

そして私達は、分かりやすいサインを作ることについて、どこを考えていけばいいのかという視点について、もともと持っている土佐人氣質は直せないのです、こちらの“へんしも行きや”的な車社会に関するもの、この部分は改善出来るのではないかというように考えました。

今、求められることは？

“歩くこと”そのものの価値を再認識すること



車を降りると見えるもの 感じるものが変わる
ヒューマンスケールでないと見失ってしまうもの

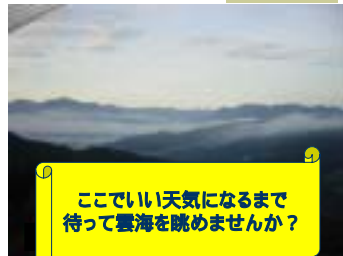
そこで今求められることは、「歩くこと」そのものの価値をやはり再認識することではないでしょうか。

これは、どこの市町村でもごくごく普通に見られる田んぼを取り巻く農村風景ですが、車を降りると見えるもの・感じるものが変わってまいります。小さくて分かりにくいですが、春先には小さなオタマジャクシが、歩くことでそこ

に発見できるかもしれません。こういうミクロで、ほんとに豊かな風景というのは、車から降りて歩いてみないと決して発見できるものではありません。ヒューマンスケールじゃないと見失ってしまうものがあると思います。

“本当に使えるまちのサイン”とは

- いいもの(郷土の誇り)の再発見
- その過程で見つかったいいものを知らせる
- いいものがいまいとわかるようなサインを作る



車から降りる・人が集まる

経済効果

そこで本当に使えるまちのサインはどんなものかと考えた時に、例えば、これは土佐町の雲海の風景です。朝方・夜更け前後に、ある特別な気象条件のもとに発生する、ラッキーな人だけが見られるような雲海の風景です。こういった、まるで里の誇りとも言えるような「いいもの」を再発見する、その過程で見つかった「いいもの」を、より多くの人に知らせていく。そ


して、地域の人自身も気付いてなかったような、「いいもの」がいまいと分かるようなサインを作ってみてはどうかと考えます。そのサインによって、車から降りて人が集まる、そういったことにつながるのではないのでしょうか。例えば、ここは、この雲海がなかったら、車で通過されるような風景かもしれません。例えば、このように、「ここで良い天気になるまで待って雲海を眺めませんか？」のサインを作ることによって、何日も雲海を待つためにここで寝泊りする人が現れれば、当たり前のことですが“経済効果”にもつながってこようかと思われま

話を進めましたが、より重要なことは、地域のひとりひとりが自分の地域の良さを理解して、その良さを表すサインをつくっていくことなのです。

“本当に使えるまちのサイン”とは

より重要なこと


- 一人ひとりが自分の地域のよさを理解する(情報探知)
- 一人ひとりがそのよさを表すサインを作る(情報発信)



これは“おびさんロード”のアートボードです。自分達の住む地域の楽しい情報を、より多くの人に伝えていく、このようなサインも、一つのこれからのサインのあり方だとは思われます。そして、このようなものに限らず、こういう地域でほんとうに住んで良かった、暮らして良かった、楽しいというような「おばちゃんの笑顔」、これもその地域を如実に示すサインなのではないかと私達は思います。

ここにお集まりの皆様方が、こういう「おばちゃんの笑顔」を作り出すために果たす役割というのは、大きいのではないのでしょうか。

終わりに-お遍路文化の再発見



“歩くこと”に敬意を払う意識・思想
安全にたどり着くための知恵として結実

以上でだいたい報告したいことは終わりますが、最後に、「歩くこと」を通じたサインのあり方というものを考えてきた時に、私たち土佐人は、もともと歩くことに敬意を払う意識ですとか思想を、こういう“お遍路文化”を通じて持っているなという事に気付かされました。右の写真はボランティアさんが、歩き遍路の方々が迷わないように、電

柱とかガードレールとか所々に貼っているシールです。これも立派なサインだとも思われますし、こういう歩き遍路の方々が迷わないようにお接待をするような文化も安全に辿り着くための知恵として、車の社会が始まる前から、およそ千年も定着して、形として結実している、このようなことを再発見したわけです。

以上で私どもの報告を終わります。ありがとうございました。

藤崎吾川村長コメント

「ちょっとした気づかいが、訪れた人たちに、非常にいい感じを持ってもらえるということがあると思います。そういった小さな気づかいが、これからは必要ではないかと思います。そういう意味で、非常に親切に、これから先の行政において気をつけていくということがより大切なことではないかという内容でありました。いい発表でした。」



グループ会でのヒトコマ

